

## 研究所だより

前号の「会員のひろば」に投稿頂いた林義樹先生の授業に参加させていただきました。見学のつもりが、参加になってしまいました。先生の言葉でいえば「参画」となるのだと思います。授業に「参画」している学生は英語の先生の卵たちで教育実習を目前に控えての授業です。授業で扱っていたテーマは「教科外授業のあり方を皆で共有しよう」です。全員が直前に控えた課題ということもあり、かなり実践的に考える結果になったようです。私が興味を持ったのは、授業に全員が参加していること。自分の考えを述べる場が準備されていること。細かな点は不明ですが、とにかく授業に参加している全員が互いに考えていることを共有できることなどです。実は、労働者協同組合の研修会などに参加する度に、「いかに学ぶのか」「何を学ぶのか」などについて考えてきました。端的に現状を指摘すれば「なぜもっと勉強しないのか」ということがいつも頭から離れず、研究所の役割なども関連して深い悩みが進行していました。ところが、林先生に頂いた『学生参画授業論—人間らしい「学びの場づくり」の理論と方法』を読んでいるうちに、集団での学びの方法論とでもいう点で大きなヒントがあったのです。とても感激しました。

そしてもう一つが堀越芳昭先生の最近の論文「協同組合原則における協同組合教育の基本原理解」(ロバート・オウエン協会年報21)です。協同組合にとって「教育」とは何であったのか。協同組合原則の中での位置づけを歴史的に俯瞰するとともに、個人主義的教育観の変更を迫り、協同組合教育こそ新しい教育観が必要であると論じています。「教育」ということが非常に大きなウエイトを占めていることはよくわかっているはずなのに、仕事の忙しさが優先するのが常です。研究所の役割を含めてここでじっくりと協同組合にと

って教育を考えてみないといけないと感じています。幸いにしてセンター事業団も実践的な関わりをもって研究会を支えてくれる体制がとれることになりました。研究会の名称はまだ決めていませんが、関心のある方はぜひご連絡ください。

福祉コミュニティ研究会のメンバーを中心にイタリアの社会的協同組合の調査を行います。研究所からは菅野主任研究員が参加します。これまでもイタリアへは何度か調査団を派遣していますが、社会的協同組合の調査は初めてです。組合員の構成や地域との関わりなど興味深い点が多くあります。地域の必要に応じて協同する運動の典型が社会的協同組合に現れているように思います。また、全米退職者協会の調査に私(坂林)が行ってきます。昨年度に引き続きの調査となります。今回は総勢30人近い人数です。受け入れのAARPも大変だと思いますが、こちらでの基礎学習を踏まえて課題別に具体的な中身に踏み込んでの調査と、地域支部で実際に活動している会員にも直接聞き取りができる予定です。

第7回総会の通知と議案を同封しました。今回の会場は大塚の「東京労働会館」です。日本労働者協同組合連合会の本部が昨年12月に移転した建物です。前回の「研究所だより」でも書きましたが、従来より時間を長くとりました。研究所の方針についてじっくりと話し合いたいと思います。なお、当日参加できない方は、議案をご覧ください。是非「委任状」の送付にご協力ください。毎年、成立にこぎつけるのに事務局が苦勞しています。全国にいる500人の会員の総会ですから、全員の参加を望むことは困難ですが、可能なら文書で意見を寄せて頂ければと思います。是非、よろしく願います。

(坂林 哲雄)